

第10回

古代・中世の朝鮮半島

監修・講師
六反田 豊

学習のねらい

古代インドで成立した仏教は、その後、中国へ伝わり、さらにそこから朝鮮半島へと伝えられた。古代朝鮮の国々は仏教を厚く保護し、特に新羅では支配者の間で護国仏教の考え方が広まった。この考え方を受け継いだ高麗では、外敵の侵入を撃退するために国を挙げて「大蔵経」の版木作成が行われた。その一方で仏教の教えは次第に庶民の間にも浸透していった。古代・中世の朝鮮半島の歴史を仏教に焦点を当てながら学ぶ。

- ・ <朝鮮三国への仏教伝来>
- ・ 高句麗 百済 新羅 冊封 朝貢
- ・ <新羅の仏教文化とその特徴>
- ・ 護国仏教 白村江の戦い 仏国寺
- ・ <高麗の仏教文化と大蔵経>
- ・ 高麗 大蔵経 海印寺

■ ■ ■ 朝鮮三国への仏教伝来 ■ ■ ■

古代の朝鮮半島では4世紀末、高句麗、百済へ仏教が伝来した。主に華北の前秦から高句麗へ、江南の東晋から百済へと、それぞれ冊封^{さくほう}関係にあった中国の王朝が、新しく先進的な文化として仏教を伝えた。朝鮮半島の国々では仏教が発展を遂げ、百済では磨崖三尊^{まがいさんぞんぶつ}仏が作られた。6世紀になると、百済から日本へも公式に仏教が伝えられ、多数の百済僧が日本を訪れ、古代日本の仏教文化形成に多大な影響を与えた。新羅への仏教伝来については諸説あるが、新羅の政府が仏教を公認したのは527年である。

■■■ 新羅の仏教文化とその特徴 ■■■

新羅では、公認以後、仏教が本格的に社会へ浸透しはじめ、都の慶州周辺には大規模な寺院が多数建立された。多くの僧が唐へ留学し、帰国すると朝廷や支配階層の間に学んできた教えを広めた。高句麗、百済との対立が深まるなか、新羅の支配階層は護国仏教の考え方を強く押し進めた。護国仏教とは、新羅は仏に守られた特別な国であり、仏教を信仰すれば国を護ることができるという考えのことである。当時の僧のなかには、敵を撃退するためには殺生も容認されると主張する者もいた。唐留学を目指したが途中で断念した僧の元暁は、国内にとどまって仏教研究を深めるとともに、歌や踊りを通じて庶民の間に仏教を広めることに力を尽くした。こうして仏教は次第に庶民の間にも浸透していった。新羅の仏教は6世紀末に日本にも伝えられた。

■■■ 高麗の仏教文化と大蔵経 ■■■

10世紀初めに新羅にかわって朝鮮半島を支配するようになった高麗でも、仏教は護国の思想として国家の手厚い保護を受け、多数の寺院が建立され、国家的な仏教行事が盛んに催された。高麗時代の仏教文化を語る上で忘れてならないのが、「大蔵経」の版本作成事業である。

「大蔵経」とは、仏教の経典や解説書を集成したものである。初め、契丹の侵攻を仏の力により退けようとして11世紀に作られたが、1232年、モンゴル軍の侵略で焼失したため、1236年、モンゴル軍撃退を祈願して再度の彫版事業に着手し、戦争中の困難な状況の中、15年あまりをかけて約8万枚、文字にして約5,200万字分に相当する大量の版本を完成させた。この版本は現在も、韓国の海印寺に保存されている。

考えてみよう 調べてみよう

- 後漢滅亡以降の中国における仏教の広がり、朝鮮半島との関係をおさらいしよう。
- 仏像が数多く作られた日本の飛鳥文化における中国、朝鮮半島の影響について調べてみよう。
- 古代インドで成立した仏教が各地に伝わっていく過程を調べてみよう。
- 中国での仏教の普及において鳩摩羅什や玄奘三蔵などが果たした役割を調べてみよう。
- 支配者と庶民それぞれに対して仏教が果たした役割を考えてみよう。